

別室登校の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、登校意欲はあるが、心理的要因からクラスに入って授業を受けることが困難な生徒である。

具体的な取組

○取組の概要

毎週火曜日、水曜日及び金曜日を開室日と定め、10時から13時までの間、別室登校することができる。

別室で給食を食べることができ、下校時には他の生徒に合わないよう時間的配慮を行っている。

○事例

当該生徒は、段階を踏むことにより、今年度は別室を使用せず、クラスに入って自分のペースで授業を受けることができるようになった。

<別室での学習>

自学自習が基本であり、読書をしたり教科の問題集に取り組んだりしている。

希望すれば、別室からオンラインで授業に参加できる。

○別室の様子

昨年度までパソコン室であった部屋を利用している。支援員が親しみのある絵や言葉で利用する生徒の出迎えをしている。



成果

別室をスモールステップとし、教室に入って授業を受けることができるようになった。

「別室登校したい」という保護者と生徒の希望に応えることができています。

課題

様々な理由で登校できていない生徒は多いものの、現在は別室の利用生徒が少ない。担任からの勧めのみでなく、周知方法の検討が必要である。

不登校支援と別室指導について

不登校生徒の状況

別室指導を利用している生徒は、様々な理由から不登校・登校しぶりとなっている生徒である。対象生徒は、対人恐怖で教室に入れず、集団行動が困難な状況である。

具体的な取組

○不登校生徒の居場所を作る

教室に入れない生徒のための別室指導を実施している。別室は週4日、9時～12時の間に開室している。開室中は、別室指導支援員が生徒対応を行っている。当該生徒の希望に合わせて、登校時間を決めている。



○不登校対応シートの活用

生徒ごとに、いつ、誰がどういう対応をしたかが一目瞭然になるシートを作成している。当初は、校内で担任や関わるスタッフが変わっても対応の変化が少なく済むように記録していた。その後、小中連携においても同じシートを活用することになり、現在は小学校から本校へ進学する際の引継ぎにも利用している。

○別室での過ごし方

当該生徒は自習・支援員や担任との交流等を行って別室での時間を過ごしている。

別室での生活が安定することで、生活リズムが改善したり、少人数の中でなら自己表現することができたり、社会的自立につながるように支援した。

○不登校対策委員会

隔週で実施し、不登校生徒の現状把握と確認を行っている。特に最後に生徒本人を確認した際の状況を共有し、生徒の安全管理に努めている。委員会参加者は、不登校担当教員・特別支援コーディネーター・養護教諭・各学年担当教員・生活指導主任・学校生活支援員・特別支援専門員・SC・SSWである。

成果

当該生徒は、不登校であったが校内別室指導支援員が在室することによって、学校の中に居場所ができ、毎日登校することができるようになった。

課題

別室の利用人数が増えるとルールの設定が必要となり、それを浸透させること。継続した支援員の人材の確保。

別室を活用した段階的な不登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、学習や課題や集団生活への不安など様々な要因によって登校しぶりが見られている。校内別室を設けたことにより、別室での活動を通して、少しずつ教員や他の生徒と関わることで段階的な教室復帰を目指している。

具体的な取組

○個人での活動と小集団での活動

別室は週3日、給食後の昼休みまで開いている。授業時間は自分で用意した自習教材に静かに取り組む一方で、給食は別室利用生徒とまとまって食べ、昼休みはカードゲームをして交流をしている。カードゲームは、ルールを守りながら周りの友人と適切なコミュニケーションを学ぶ良いきっかけとなっている。

○継続的な意思の確認

入室する際は、利用する曜日・時間を決め、利用申請書を提出する。提出に当たっては、どのペースで利用すれば継続して登校できるのか、家庭でよく話し合って利用曜日・時間を決めることで、1週間の生活リズムを意識することを目的としている。また、別室の様子を話したり、これからの目標を確認したりしている。

○日誌のやり取り

別室に登校した日は「利用日誌」を記入する。日誌には取り組んだ学習内容のほか、教員へのメッセージ欄が設けられており、担任が授業等で別室に行けない時もコミュニケーションが取れるようになっている。また、日誌の保管場所を職員室にすることで様々な教員と関わる事ができている。

○別室指導支援員の活用

別室指導支援員は、利用する生徒の一番身近な話し相手となり、徐々に関係性を築いていく中で、悩みを打ち明けたり、進路について話したりと教員と利用する生徒をつなぐ重要な役割を果たしている。



成果

別室を活用することで、まず生活リズムを整えさせ、次に「学校」という場所に慣れ、さらに「教員や友達」という人に慣れさせていくことができる。その結果、一部の授業に参加することができ、校外学習や体育祭など、学校行事にも参加することができた。

課題

別室には登校できるものの、教室の授業に安定して参加するためには時間を要する。また、学習の遅れを補充することは難しい。

校内別室で一步踏み出す力を育む

不登校児童の状況

対象児童は、集団の中や一斉指導の中では息苦しさを感じるが登校への意欲はあり、少人数の活動や短時間の登校ができています。

具体的な取組

○支援員等の見守り

校内別室指導支援員やSCの見守りのもとで自らの体験や思いを語り、共感したり励まし合ったりする姿が見られる。

○日直活動の試行

自身の居場所をよりよくするための活動として、また集団の中で発言する練習のために別室で日直活動を取り入れた。

○安全基地から外へ

「行事への参加」を今年度の目標の一つにした。2～6年生がお店を開き全校児童が遊びに行く「子どもまつり」に、参加できたことは自信につながった。準備が必要な行事にはなかなか参加できないが、「欠席」ではなく「見学参加」となることで意欲をもたせたい。

○学習への取組

当該児童の担任が当該児童の意欲や学力に合わせた学習課題を用意している。それ以外に午前中に「視写」に取り組む時間を設定したところ、一日のリズムが「学習」から始まるようになった。



成果

継続的に登校できており、別室で過ごすことに楽しみと安心を感じることができている。小集団の中で他者の努力している姿に励まされ、自分なりの目標をもって生活できるようになってきた。

課題

週2日、各3時間の限られた時間の中で、通室する児童に対して校内別室指導支援員が個々の状況に応じた支援を行うこと。

自分に適した「居場所」を見付ける

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の頃から不登校傾向にあった。中学校入学を機に教室復帰を目指し、一時は教室で生活を送ることができていたが、徐々に欠席が増え、再度不登校となった。集団での人間関係や、大きな声が得意ではないため、学級等での集団活動が苦手である。

具体的な取組

○複数の選択肢を案内

不登校状態にある生徒と保護者に対し、校内別室登校や外部支援等も踏まえて提案している。(SC・相談員への相談、教育相談室の利用)

※必要に応じて、部活動の継続、適応指導教室の利用、SSW支援を案内している。

○教育支援センターとの連携

よりたくさん登校したいと希望する場合や登校の目的に合わせ、教育支援センターとの並行利用をしている生徒がいる。

○進路へ向けた支援

利用生徒が3年生の場合は、校内別室登校時を中心に、学級担任と進路へ向け話し合い、準備を進めている。

○校内別室登校について

・校内別室指導支援員が配置されてからは決まった教室で、週5日、3校時から昼休みの時間帯に開設している。

※支援員が配置される前は、保健室や相談室を活用しており、毎日の安定した開設が困難な状態であったため、十分な対応ができなかった。

・校内別室登校では、支援員以外の教職員とも関わる環境をつくるため、個別ファイルの書式を工夫して、生徒・担任・支援員がやり取りできるようにしている。また、登下校時に職員室で個別ファイルの受け渡しを行っている。

・利用生徒は各自課題を持参し活動している。支援員は、活動の見守りと生徒教員間の連絡調整を行っている。



成果

当該生徒は、別室指導支援員配置により、校内で安心して別室登校することを3年間続けることができた。また、相談室、部活動、校内別室、適応指導教室など、校内外複数の居場所を見付けることができた。さらに、別室登校体制の充実により、他の利用生徒や学級担任と定期的に話し合える場が増えた。

課題

別室指導支援員配置により運営できている現在の校内別室登校体制を、継続し拡充していけるかが今後の課題である。

環境整備・情報共有を重視した校内別室指導支援員の活用

不登校生徒の状況

対象生徒は、環境の変化への対応が苦手で、昨年度、進級直後は週1日程のペースで休んでいたが、4月の4週目くらいから教室に入ることを拒むようになり、5月から欠席が続くようになった。教室に入ることを拒んだため、校内別室登校にして、支援員による学習の見守りなど、1年間、全校体制で支援した。特別支援教室も利用した。

具体的な取組

○校内別室の整備

小会議室や教育相談室などの小規模教室を状況に合わせて校内別室とし、対象児童の個別学習等に活用した。また、特別支援教室の巡回指導がない日は別室とするなど、校内資源として活用した。



○校内別室からの継続的な支援

当該児童は学力に課題があり、校内別室から教室に復帰できたとしても、学習でつまずいてしまう恐れがあった。そこで、教室での学習で学習支援を重点的に行うことで、児童が安心して過ごせるよう配慮した。



○学級担任との情報共有

教育現場で実際に児童と接した経験のない支援員が多かったため、育成が急務であった。朝や放課後に当該児童の学級担任と支援方針について打合せをし、対応についての共通理解を図った。



○業務日誌の作成

支援員の登録者数が10人を超えていたため、当該児童の情報共有が課題であった。

そこで、支援内容や児童の変容について毎回記録することで、支援内容の充実を図った。



成果

今年度、進級してクラス替えがあり、学級担任も変わった。そのタイミングで、特別支援教室専門員や校内別室指導支援員の励ましも後押しとなり、教室復帰を果たした。11月1日現在までのところ、欠席日数は延べ13日で、通常どおり登校できている。

課題

当該児童は精神的に不安を感じやすい傾向があるため、今後も保護者との連携を密にしつつ、教室内でできる支援を継続していく。

友達と関わることの楽しさを味わい、保健室登校から教室復帰

不登校児童の状況

昨年度まで登校できていなかった児童と今年度から保健室登校の児童等がいる。欠席することはあるが、友達と遊びたい気持ちをもって登校したり、教室の授業に参加できるようになってきたりしている。それぞれの異なる状況をお互いに理解し合いながら保健室で過ごしている。

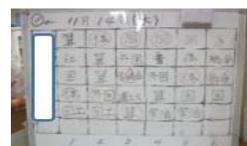
具体的な取組

○別室の環境

別室の利用により、学校が楽しい場所、友達と関わるができる場所という気持ちになるように、生き物を飼ったり、植物を育てたり、休み時間には、支援員やサポートスタッフとの鬼ごっこをしたりした。また、体育館で体育の時間を設定し、体を動かす気持ちの良さを感じられるようにした。

○週予定の共有

担任から次週の週案のコピーを受け取り、保健室のホワイトボードに書いて、児童が確認できるようにした。朝、一日の授業予定を見てどの授業に教室に行くかを当該児童が決め、赤丸をつけるようにした。児童によっては、登校したら担任に朝の挨拶に行き、その日教室に行く時間を約束している。



○図工、音楽の授業

図工や音楽などの専科の授業から教室に行くように促した。授業に行くときには、仲の良い子と一緒に授業に参加してよいことにした。仲の良い子と一緒にという安心感から授業に参加することができるようになった。不安がある場合は、支援員等が付き添うようにした。



○担任との連携

時間ごとや一日の終わりに学習した課題を担任に提出する。児童の頑張りを担任が把握し、声かけ等を行うようにした。行事等では物を運ぶ、片付けるなどの役割を果たし、自信がもてるようにした。自分ができること、不安なこと、困っていることを言葉にすることで、周りに助けてもらえるという経験を積めるようにした。

成果

利用する児童は、登校できる日や教室で過ごせる時間が増えている。学校が安心、安全な場として認識されてきている。

また、利用する児童によってできることは異なるが、自分自分なりに頑張ろうとしている。自分がやり遂げられないと認識することを「無理」などの言葉ではあるが伝えられるようになってきている。利用する児童の多くが、学習に取り組もうとする時間が増え、担任との関係が構築されてきている。

課題

児童に適した対応をするには、環境づくり、人の配置、学習準備、保護者との連携等が必要である。

校内別室指導支援員配置校について

不登校生徒の状況

対象生徒は、行事の実行委員、委員会委員長に立候補し、積極的に挑戦する姿が見られたが、それが重荷になっていた。学習面においても、得意な教科が少なかったようである。1学期の定期考査後、休みがちになり、夏休みに入った。2学期は、始業式後欠席が続き、行事や特別活動をきっかけに登校を促したが登校には至らなかった。

具体的な取組

○苦手意識の解消

担任は、週に2、3回、保護者との電話連絡の内容から、当該生徒の重荷になっていることを取り除くことを提案した。学級の友達とは会いたいが、教室に入ることができずにいたため、別室登校を担任から提案した。保護者同伴で登校し、別室教室へ登校している。

○別室指導員との関係

別室登校も一人でできる日もあった。他の別室利用生徒が人目を避けるなか、当該生徒は避けることもなく、休み時間には友達に会いに教室に行くこともあった。別室指導支援員に話を聞いてもらうと、安心していただけた。将来の話や自分の考えを話す場面が多かった。

○自分のペースで学習

開室時間は11:20~15:20のため、学校の時程とは異なる。しかし、生徒は自分の課題や興味のあることを自分のペースで進めている。

○安心できる環境の整備

生徒がリラックスできるように、机の配置やソファの配置など環境整備に努めている。



成果

自分のペースで学習することができるので、集団行動や固定された時間に苦手意識がある生徒も別室に登校することができた。

当該生徒は、学級の中で感じていた孤独感を排除し、安定した居場所を確保することができた。

課題

- ・校内で使用できる教室、受容人数に限界がある。
- ・別室の学習環境を充実させること。

別室指導支援委員会による組織的な対応について

不登校児童の状況

対象児童は、昨年度後半から登校しぶりが見られた。一時は保健室登校をしてから教室に入ることを試みたが効果がなかった。別室であれば朝から登校し学習を進めることができるため、支援員を配置して別室登校を始めた。

具体的な取組

○別室登校支援委員会

校務分掌に別室指導支援委員会を新たに設置し、別室登校支援の具体的な方向性を決める組織を構成した。

別室指導支援委員会は管理職をはじめ、生活指導主任、養護教諭、SC、当該児童に関わる別室指導支援員で構成され、それぞれの役割を明確化した。

○配慮事項

別室登校支援委員会の支援方針の基、児童によっては一日の中で数時間、教室で学習する時間も設け、学級とのつながりが途絶えないよう配慮している。



○環境整備

校内別室指導専用の教室を新たに整備した。机と椅子の他に、児童がくつろげるスペースにするために、マットやローデスクを設置した。他人の視線が気になる児童のためにパーティションを用いて個人に配慮できるスペースも確保した。児童の状況に応じて、学習に取り組む環境を選べるようにした。

○自己決定と振り返り

当該児童は今日の予定を確認し一日の目標と具体的な学習活動を決め、最後に振り返りをして児童の登校意欲を高めるようにしている。基本的には学級の時間割と同じ流れで学習している。

支援員は、その日にどのような支援をしたのか、活動記録簿に記入し、関係教員・管理職と情報共有を図っている。

成果

担任が空き時間を利用して個別指導を行いながら、学級へ少しずつ入ることを提案していった。その後、廊下から教室の様子を見学することが増え、一日に1時間は教室で授業を受け、給食も学級の子供たちと食べられるようになった。

課題

児童の対応には児童理解が必要であり、支援員の力量によって依頼内容が変わることが課題である。

別室指導支援委員会による組織的な対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の後半から不登校になり、昼夜逆転の生活が続いていた。学校から登校を促しても継続して登校することができなかった。別室で、短時間でも学習することを目標にして、中学校 3 年生から別室登校を始めた。

具体的な取組

○進路指導

高校進学を視野に、校内の教育相談の資料を生かし特別支援の観点も踏まえて個別支援の計画を立てた。特に、進路に応じた別室登校での支援方針を実践しており、区内に設置されている教育支援センターとも連携を図っている。

○個別支援

教育相談担当の養護教諭が、発達障害や特別支援教育の観点から支援を計画している。支援の在り方を個別に明確にしたことで支援員が専門家でなくても支援が可能となった。



○環境整備

進路に応じた自習を行う部屋やコミュニケーションスキルを養う部屋など、別室利用の生徒の課題に応じた環境を整えた。



○自己決定

別室利用の生徒が個別の目標を設定したり、一日の流れを確認したりして、生徒の実態に即して対応している。別室の運営に当たり、保護者や教員に言われるのではなく、自分で活動内容を決めるなど自主性を育てることが効果的な別室登校支援になると考えている。

成果

当該の生徒は、別室登校を始めたことで短時間でも登校できるようになった。また、コミュニケーション能力を高める活動を他の生徒と行い、学校での発言が増え、継続的な登校へとつながった。

課題

別室登校を利用する生徒が増え、支援員のシフト調整が難しくなっている。

別室登校を中心とした不登校支援・進路指導について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の高学年から不登校状態が続き、中学校入学後はしばらく登校を続けていたが、中学校1年生の2学期から不登校となった。現在、中学校3年生に進級し、2学期から別室登校を開始し、生徒の努力に寄り添った支援を心がけている。現在、高等学校への進学を見据えた進路実現に向けて、別室登校を継続している。

具体的な取組

○別室登校での自学自習の取組

高等学校進学後の学校生活に適應するため、毎日午前9時から1時間程度別室登校し、自学自習に励んでいる。

配布されたプリントや学習用端末内の個別学習ドリルを活用し、自分のペースで学習を進めている。



○同じ担任による信頼関係の形成

中学校進学後の3年間、同じ教員（不登校対応加配教員）が担任となることで、当該生徒と保護者との意思疎通を図り、信頼関係を形成することができた。担任は毎日、授業の合間に別室登校する生徒に対して教室内で配布されたプリントを届け、会話を楽しんでいる。

○SSWとの連携

SSWと、校務支援システムや電話等によって連携を図り、生徒の情報共有を密にした。SSWが別室に訪れ、三者面談に同席したりして、学校や家庭での生活の様子や進路情報を共有した。

○定期考査の別室受験

学習意欲の高まりにより、定期考査を受ける意思が見られた。生徒は集団への適應を心配していたため、別室で定期考査を受験することができるようにした。考査後は給食を楽しみにしており、別室での喫食ではあるが、教室に給食を取りに行くことができた。

成果

別室登校の場によって、自分のペースを保ちながら自学自習に取り組むことができた。

学校外の関係機関との連携によって、多様な視点から不登校生徒・保護者への支援を図ることができた。

課題

自学自習の別室登校において個別最適な学習を保障できる学習指導、支援の方法を確立していくことが課題である。

校内別室の活用

不登校児童の状況

対象児童は、現在小学校5年生であり、入学当初は登校できていたが、特別支援学級（知的固定）在籍の兄が不登校になった後、同様に不登校になった。友人との関係ではトラブルもなく、特に心配事はない。不登校となってからは、学級から離れてしまったことからか学級集団に戻ることに強い不安を感じている。

具体的な取組

○段階的支援

別室登校では、次のように段階的に活動の量と質を高めていく支援を行っている。

- ① 登校だけ
- ② 別室での活動時間の延長
- ③ 別室での給食
- ④ 学級での活動等への参加

○支援員との関係づくり

別室指導支援員との関係構築のため、自宅を訪問して会話をするところから始めた。

・その後、支援員が自宅まで迎えに行き、別室までの登校支援を行った。

○パーティションの活用

安心して過ごせるように、一日の過ごし方の見通しをもてるようにし、パーティションで空間を仕切ったりするなどの環境整備を行った。



○学習支援

不登校が続いていたため、学習面の遅れがかなりあった。当該児童が一番興味をもっている理科を中心に学習支援を行ってきた。

成果

これまで保護者が連れ添っての登校はできなかったが、支援員が自宅まで迎えに行くことで、別室への登校ができるようになった。

現在、週に1、2日登校できるようになり、休み時間などに友達と交流する場面もできてきた。

課題

当該児童の登校を増やすために、別室対応ができる支援員が毎日いること。

不登校生徒の登校支援に関する取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 6 月頃から運動会をきっかけに教室での不適応から、身体症状による登校しぶりが始まった。欠席が増えたことにより、教室への更なる不安感や居づらさなどを感じている。2 年生の 7 月頃から教室へはほとんど行けなくなり、個別対応による登校支援を行っている。

具体的な取組

○保護者との連絡・当該生徒との関係づくり

1 年生の 1・2 学期はこまめに保護者に連絡をし、当該生徒とも電話のやり取りを行い、本人のつらさを聞き取りながら、関係づくりを行った。『明日は登校する』と言うものの、欠席する日も多かった。

○S C との面談

改善しない身体症状を理由に登校ができない状態が続き、1 年生のときに保護者、当該生徒及び S C との面談を設定した。教員とは別の立場から、現状や当該生徒の様子などを確認することができた。

○放課後登校・行事の参加

学習への苦手意識から、授業への参加は気が向かないものの、行事などは、参加意欲があったため、行事に向けて、放課後登校で準備を行ったり、総合的な学習の時間に合わせて登校したりと、登校できそうな日を相談し、当該生徒の頑張りを認める声かけを行った。

○校内別室

2 年生になり、教室への登校が厳しくなったことを踏まえ、保護者の協力しながら、校内への登校を提案し、当該生徒の意思で申し込みができた。

2 学期から数日ほど登校できている。



成果

体調不良ではなく、教室へ行きたくないという本心を担任へ打ち明けられることができるようになった。

ふれあい教室の申請を行ったことで、教室ではない居場所の提供が可能になった。

課題

継続して登校できるようなモチベーションづくりをアプローチしていく必要がある。

別室指導支援員の対応が生徒の安定につながった

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生の男子生徒である。1 年生 2 学期から教室に入ることを拒むようになり不登校となった。その頃から人目を極度に気にする様子があったが、別室登校に向けて細かく目標設定したり、当該生徒が不安にならないように校内別室指導支援員が丁寧に対応したりして、現在は別室に毎日登校できるようになった。

具体的な取組

○個別学習の時間の設定

当該生徒が持参した教材を行うことで、自分のペースで学習が進められた。学習がなかなか進まない時は読書をする等、当該生徒の状況に合わせて対応した。学習をずっと継続するのが難しい時は刺繍や折り紙など他の作業も取り入れた。

○掲示物の工夫

生徒の作品や努力を讃える際に渡すメダル、学年通信等を掲示した。ユニバーサルデザインを意識して生徒が学習する周辺には物を貼らないようにした。



○コミュニケーション能力の向上

校内別室指導支援員とカードゲーム等を通してコミュニケーションを取る時間を設けた。校内別室指導支援員と順調にコミュニケーションが取れるようになったら、他の生徒とも一緒にカードゲームをするなどして、関わり合う活動も行った。

○運動の実施

室内でできる運動として、卓球やラケットでボールを何回打てるかを記録するなど行った。定期的に体を動かす時間を確保することで、気分転換になり、自主学習も集中して取り組むことができたり、他の生徒とのコミュニケーションも取りやすくなったりした。

成果

別室指導支援員が当該生徒の気持ちをしっかりくみ取り、焦らず時間をかけてコミュニケーションを取った結果、2 学期に行われた定期考査は他の不登校生徒と同じ部屋で受験できた。また、本人から宿泊行事に参加したいと、発言が出るようになった。

課題

補充的な学習はあまりできていない。そのため学級に戻るための学習支援が必要である。

コミュニケーション能力を身に付ける指導について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生である。小学校 6 年生のときから不登校で学校への活動に意欲的ではなかったが、校内別室指導支援員の働きかけで中学校 1 年生の後半から週 2 日程度登校できるようになっている。

具体的な取組

○時間管理

当該生徒が無理のない登校時間を決めるようにして、達成したら褒めて認めるということを繰り返した。初めは登校後職員室に来ることも支援員の先生と一緒にであったが、日が経つと自分でできるようになった。また、次の登校日と時間を決め、下校することができるようになった。

○個別の学習支援

技術に関しては、担当教員の空き時間に応じて、週 1 度技術室を使用して作品作りを実施した。毎週同じ時間に行うことにより生活習慣が身に付いた。家庭科に関しては、別室で個別指導によりミシンやアイロンを用い、作品を仕上げることができ、校内作品展にも出品予定である。

○学級との関わりの維持

当該生徒が出席できそうな授業を聞き、参加することで自信が持てるようになった。休み時間には席の近くの生徒と話をすることができ、緊張が和らいだ。別室で給食を食べることが多かったが、教室の生徒と会話ができるようになり、教室で給食を食べられる日が多くなった。

○担任と支援員との連携

別室での支援員の指導に加えて担任も空き時間に加わり、現在の心境やこれからの希望などを聞く時間を設けた。生活支援員、SSW など多くの教職員と連携を図った。



成果

総合の時間に参加することができ、職場体験の学年全体での事前学習にも参加し、校内用務主事の職場体験を 2 日間行うことができた。仕事の意義をよく理解し、時間を守り真剣に行い、当該生徒の自信にもつながった。

課題

対象生徒が登校できない日が続く場合に家庭連絡を継続していく。

別室対応を中心とした不登校支援について



不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生であり、小学校 6 年生の 10 月に中国から日本へ来た。本校入学時には通常どおり登校していたが、夏休みに中国に一時帰省したのち、2 学期以降教室に入れなくなる。昨年 9 月の開設時から別室を利用している。日本語の会話に課題があり、友人と気軽な会話を楽しめないことから、年齢相応の関係を築くことができない。現在に至るまで教室には入れず、週 2～4 日の頻度で別室登校を続けている。

具体的な取組

○校内における居場所の提供

- ・校内の空き教室を校内別室として利用した。
- ・静かで落ち着いたある教室環境に整備した。
- ・利用記録を作成し、その日の学習内容を担任に報告した。

○他者と関わる活動の設定

- ・2 人以上で行う対戦型ゲームを常備し、他者と関わりを意図的に設定した。
- ・専門員との何気ない雑談や、新聞に掲載されている言葉探しゲームを、日本語の会話に課題のある当該生徒への日本語指導の機会とした。

○作品制作の支援

- ・国語科の書き初めや、文化祭で生徒全員が展示する作品（家庭科のバッグ作りなど）を制作するために、教科担任と支援員が連携して支援した。
- ・ミシンの使用など、その場に行き活動する必要がある時は、家庭科準備室に支援員や教員が付き添い、安心して活動ができるようにした。

○支援員の役割

常駐する校内別室指導支援員は、教科指導はしない。支援員の役割は、挨拶をして健康観察をし、当該生徒がその時間に学習内容を確認したら、同じ空間にいて「見守る」ことである。学校に、自分のことを受け入れる空間があり、そこでは安心できると生徒が感じられるようにすることを基本姿勢としている。

成果

別室登校当初は静かに読書することが多かったが、次第に支援員に心を開き、コミュニケーションを取るようになった。教室の授業に参加はできなかったが、別室で 2 年生の 4 月から職場体験の準備に着実に取り組み、7 月の職場体験に参加し、成功させることができた。

課題

学年の教員を中心に、多くの教職員で生徒を見守る体制を構築していくことは引き続き課題である。

不登校生徒の別室登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学後は通常どおり登校し、部活動にも参加していたが、中学校1年生のときに友人との距離感に困難さを抱え、トラブルがあった。また、保護者との関係が築けず、不登校となった。保護者が、対象生徒が登校できていない現状を受け止められずに不安定な部分もあった。

具体的な取組

○相談員との連携

相談室が別室すぐ隣にある。また、心のふれあい相談員の来校日と別室開室日が同じため、気軽に相談に行くことができる。



○担任との連携

担任や学年の教員が授業外の時間に、配布物を手渡したり、様子を見に訪れたりしている。また、週1回の会議では、担任以外の教員にも別室の様子を確認することを呼びかけ、共通理解を図り、別室登校の支援を続けていくことを目指している。

○校内放送の活用

お昼の校内放送も別室で聞けるようにし、学校内の様子を知るきっかけの一つになっている。



○栄養士との連携

栄養士と連携し、別室でも給食が食べられるようにしている。



成果

当該生徒は、欠席が続いていたが、週2日は別室に登校できるようになった。また、別室登校日以外の日には教育支援センターに通えるようになった。

課題

学習課題を少しずつ与えるなど、学習支援の充実について検討していく。

校内別室登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、内向的性格で、小学校から対人関係が苦手な友人が少なかった。中学校でも新しい友人がつかれず、1年生3学期から欠席が増え、2年生2学期に別室登校となった。他人の視線が気になり、教室に近付けないが、学級への帰属意識はあり、学校行事は別の場所で見学することができる。描画が得意で集中力も高い。

具体的な取組

○生徒のリズムを大切にする

集団生活のリズムの順守よりも、個人の日常生活のリズムを大切にしながら恒常的な登校を促す

「給食」の時間の前後、数時間を学習の時間とする。

学習に集中できなくても「出席できたこと」を大切に自信をもてるようにする。

登校時間や校内ルールの順守よりも、「継続的な登校」を優先する。

○生徒の良さを生かす

集団適応力を高めるよりも、個の力を伸ばし、当該生徒の良さを生かす。

集団内での自身の役割を考える機会を設定する。

学校行事の冊子の表紙絵を担当するなど、得意なことで当該生徒の良さを教室の活動に生かす。



○褒めて、受け止め、勇気付ける

登校、個別学習等に取り組み達成した時、必ず褒める。

精神的に落ち込み口数が少なく元気がない時、状態を受け止めて寄り添う。

自らの意思で行動を試みるが、失敗を恐れ前に進めない時、前向きな言葉で勇気付けて行動を支援する。

○生徒のペースを大切にする

「心のリハビリ」を念頭に「あせらず・とがめず・きめつけず」を方向性として学期ごとに判断し、長期的なスモールステップで支援する。

【第1段階】別室での継続的な登校

【第2段階】特定の教科のみ授業参加

【第3段階】教室内での授業参加

成果

週2日程度の登校であったが、3年生になり教育支援センターにも通所するようになり、1学期の欠席は1日だけになった。

別室では、自ら学習課題を選択して取り組み、進路先も得意な描画表現が継続できる学校を自ら選択した。

課題

異動により教職員が替わった際の、別室登校支援の継続。

校内別室指導支援員活用による校内別室の充実について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生であり、周囲の様子を過度に気にしたり、強いこだわりから他の生徒とトラブルになってしまったりしていた。トラブルにより欠席することがあったが、2 年生の 2 学期から、別室への登校を続けることができています。保護者は当該生徒の様子は理解している。

具体的な取組

○不登校に係る指定項目数値の減少及び解消

校内別室は 8:40 から 14:30 まで平日は毎日開室している。現在、校内別室を利用している生徒は 22 人いる。不登校生徒も多くいるが、校内別室を利用することにより、登校ができ、不登校にならない生徒もいる。当該生徒も校内別室があるため、登校できている。

○組織力の向上

校内別室の運用については、特別支援教育校内委員会で随時打合せを行っている。当該生徒だけでなく、他の利用生徒も過ごしやすい空間をつくれるように運用方針に沿った支援方法を支援員は実施している。

○校内体制の強化

校内別室に登校している生徒に対して、担当教員だけでなく、学年に関係なく多くの教職員で対応することができた。学習面に不安を抱えている生徒もおり、教職員によるフォローにより教室復帰に向けて行動することができた生徒もいた。



○個々の不登校生徒への支援

校内別室指導支援員と担任や学年教員が連携を取り、日々の流れや当該生徒の所属学級の時程などを当該生徒に伝えている。予定外のことや他の生徒の様子分からないと強い不安を覚えてしまうため、生徒の安定に大きく寄与している。



成果

校内別室指導支援員がいることにより、校内別室をほぼ毎日開室することができている。生徒が家から出て、登校するための場所、登校している生徒が不安を抱いてしまった時に避難できる場所として利用することができている。不登校者数の減少に効果を上げている。

課題

校内別室利用者は増加傾向にあり、学習のフォローや SST など、専門性の高い指導が必要である。

別室指導による不登校の改善について



不登校生徒の状況

校内別室では、生徒一人一人の状況について、不登校対策委員会で対応を検討し、個に応じた支援をしている。

具体的な取組

○中学1年生の生徒への支援

当該生徒は、1学期後半から欠席が続き、不登校となった。9月に入り、担任と話し合い、別室登校に関心をもち始め、校内別室指導支援員につなげ週3日を目安に別室での学習を始めるようになった。10月末の校外学習に参加後は、教室に出られるようにもなった。

○中学3年生の生徒への支援

当該生徒は、2年生の3学期に別室登校を始め、当初、週1日の登校を目指した。校内別室支援開始1か月後には、生徒の学習意欲が高まり支援員の個別の学習支援が始まった。

当該生徒は、「都立高校に進学したい」という思いが強く、3年生に進級してから教室復帰を果たした。現在、メンタル面で不調な時は、別室の支援員を訪ねている。

○中学3年生の生徒への支援

当該生徒は、部活動があるときは午後から別室登校を継続的に行った。教育支援センターにも通い、進路ではチャレンジスクールや通信制高校を志望し、更なる学習意欲をもち始めた。

そして、9月から別室支援員につなげ、受験に向けた学習を個別指導で教わるようになる。

○中学2年生の生徒への支援

当該生徒は、1学期の終わり頃に不登校となった。

9月から別室登校を始め、その後、支援員と明るく話ができるようになった。現在、週1日の別室登校と学習への取組を目指して、努力しているところである。

成果

- ・校内別室指導支援員とコミュニケーションが取れるようになった。
- ・生徒とのコミュニケーションがスムーズに行えることで生徒の学習意欲が高まった。
- ・支援員の個別の学習支援も充実してきた。
- ・その結果、別室を利用する生徒の学校での滞在時間が週1時間以上は、長くなってきている。

課題

個別の対応だけでなく、集団の学習を見据えて、別室での生徒への対応を工夫して、教室の学習に移行していくことが課題である。